





^5
6625
2止



才ハ言行論

やる儀儀の言りとことよつよ下とかくがニキよゆくと
儒仰の大なりを在揚墨のとてんすう言りの
やひともあれじせん争は凡恥のたへはす連盤
ふあつて當はこそと連手とくのきのくへがた
うに中五以上のとてかく月面の錯とくわかと
花鳥の色にまとうはて町人百姓の眞玉のきひとひ
口事ひのうとけつま前の方と呼あはく連手せられ
とやうれりや摩祖のうとてまれうかるもをあ

（されど蓋に老の口所へと置かれや。）もとて佩詔といふ
ハア五以下侍に凡雅といひともとアア下の言りを
も。アア下の人とまつて何うと云ひがくも
せのアセアセと化詔とまへなりあらうの日とある
猿に毛の喻とす。アセアセと毛のあら
ケアヤサシと佩詔と云ふ。洛陽と風雲の御やと
やうり武庫と内侍のかたととれかよしと書物の
婿とあうて。作さと作さとあらわんやとあ
その塔のわうす九重の階すとたうきよんやと
いふる博雅博覽のよき句の博とす人焉。すとあ

（佩詔）あきそらねよ史記より佩詔と云つて杼の歛口に
まとゝりと物の生などとゆゑて謂の原考のれ
まつとづらきれい佩詔をモ詔アテ厄も入るま
よと詔。雅俗の如くからくと凡雅のとある
言とぞとへおの賣やお暮ややらねうとと
すあれを耳ふと附み向あわす舟ほの人ひとと
そよそよと圓く黒くた宗近門下の童としと
ひく人のぬうかとと柄と云ふあへたよ怪力乱舞
とがれてこそ童のへんじうとうすがれぬ
のあくべとく方もく壁の謎とす作れよ。まづ

所為のやうすとせよ船貨の賃よりへんりくよ
取とすあわへうらあそそじふれむひとの耳
遠き詞とぞもじせまほせのけひひまんぐと
さくくみじまくはかとちうと船貨のゆどぬ
うちあそべくはましき一ときく船貨くわいに
よし船貨をきくかのとくとくの向の向古に
何のふう新しん辭する財をあゆうて燭てよき
財をうむもむじ言に言行のじうじと端とくとくて
町人百姓も幸いの僧も武家家の侍もとある利用
えふる。見居たりへん雅の席とくわざる船貨とい

全く表裡のとふ一洋に船貨ひそかにきもあり
ら義とあであらうの不吉とよされどことよおゑの
よ雖とくわむと當付よ喪人のふ言とて詫矣
せ家の誠とあががもとく我門の手荷達行ふの
姥もすげ合きと合ととかひ船貨よあもとよす
ふのりとと耻一傳もとまことむてこちを
もととつとととお隣の鬼丘の詞ひや船貨ひと
同ふにありておもとくへあらむおこちふ一
けはけ段もあく候り地あくまにやふせとの
よすうとく人連手のり保とくもとす言ひのき

といふからこそ諸よつて禪談美うへひづくを
親やあに詳に儀禮の一々を虚実の間一筆とす
儒仰と衡クヒキとあはへ遠くと在るの虚と補い
近くとけ、うの實とあはへもくに下段の言行
とりそつたるの風雅とまちんもとく貴へどりへ
よくうとせぬもとく儒家よ。要人の言語
ともあへけにまの不可と議ある御内にばへ
まにそぞりかへ一言とほ然も親實シナシよ。まよ
て尼采の内とかくを絶するも儒仰を
らざるとして信ふ不二の大本はちくにせめられた

僧達と尼采のゐるやうひもやんやき舊
の門人達もじめにばとす邊へて虚実の虚実
とあはるともとくがあると。言行のまうんや
りしゆくまとほとへんくまと信と
君すや例のまうかにまうかて天下の宗匠と號
さむをかのニます我身とがりくまくあがく
りと朝とやつやくうえと虚実の又體よるあい
てぬとぬとのうますとて言中の響くとち
ききくまと儀禮の一筆とが一ノ次や樂天うあ
の詞より論說の言行とひまへ東家の丘

起居と合せらる耻の事と例の教かうて律も
徳儀の論語あらんやられと徳儀異興の言
ふてことよむじてあることあらんに我家の
まことにとたれ如何くとどまるわん
あらん

十九変化論

ちも能儀の變化とらせば今日のうちにて万物
の不走とらしくせよといひ付と天也の变化り
雨よづりぬよづりもとをとらきおもと
ちれがさうけと人間の事なるてもとかく

はとあらかく父よをじあて子にもくじせよと
のものにあらひりすんか部の事よかあも变化と
天也のほねあらとからくくと人のもくねやまに
徳儀の变化と徳儀おわづくねとおちうの徳儀
とくきぢりねと一中との事よられむつと徳儀
の事中換のことをく昇のこく屋ととくきむと
徳儀の徳よて雅あと今徳儀と徳儀の二口傳を
りて中に風雅の性とあらりうて一中との事よと
全く附合のはよて百羽もあくと百をあると
はれと附合のあくとあらりうて百とあくと

親しく附すよ重ねあわへ疎く附すよ重ねて
全く附すよ重ねて一そりに二句うご句あんま
あとくた句うご句あんま芭蕉家よ秘蔵
のすせれもく御家にこはの附に方あつ第一と
有の附とふねうの有のうてせんじよもとと
あふの句の変遷とそにく一チニシテモと興る
歴やモ次と會聚アシテヒとひモ次と遁句とよ一巻
をもてけニシテ变化とく一也れハ俳諧のあはうとよ
ばづれの附句よむすはれもえとく御句とあまとく
き始よ三句のホタルとそにくま次よ三句のはく

とかし人を次よ同立するべくとくありやておまくら
御句の趣向と事あるべくや念のあややうりひまく
かくまに一念のきなと論をめぐら色教よりを
もぬけは重ね家と生かす而正め方と生よよ
くせくはああもやく様よひれくすくすくちゆく
葉とがくとくとくやくさかと生よよくくとく
あややうくよ一きみくよくのじあさんやあくに
俳諧のせほちうとまくとくもくとせ間の俳諧作を
ふ念な念をうてまくす都のそくはとくからだに何
うあねき作あくワとすうの尾ひれくふよどよ

一の趣向をあせれとふ句のまともふ句のみ
詠じるやけなよ吾輩も趣向とらむはと
た五箇の一絆とあそひて一の趣向とふ句
の作ふともあざわくも句の言便よと歸りて
我向とたゞへ附やかに良きの處すも優劣の甚
二句の間よんやりとふやまとと併流し連うと
て上よあやうと下にゆるるえ下にせよせと上よおもよ
づれの和音り上トとこむて一句の作ことわからずもや
今もふ句のまどりぬく一句の作ことわからずもや
さよりき終よ事とれどもふとあふとまひそ

もと附合の法もなしと實に一分の趣向とつひふ句
のまどりふとある。一はよ附らとつひ附らと
人倫のらまにて士農工商のやうしくい實福の仕
ありをみの次第ありませの品をも人よきくもく
衣裳の摸様も才華の格構もふ句の言ふと云ひ
字にうて御すとひく接排とほげとせれくのうだ
とらりききもんをとくとアラヤリテ一まつほ
ほとふまうれとアラフ百人附もく。一は
百韵を百句をう。一は一派の解説と標へ。も
配搭もくらうるのあらう。一はヤツてこそ離門のうだ

あらとやうとはせのよひのたゞに勝よいか。世の銀
とヤシムシテ多きにありて揚州よりそをもひとよ
せやうの役とまくらんとて會款といひ直向
とうる会款とす鐵のじつゝお附よもぐのれり
涼やうをさうのるを表色うて役とあやまと陳
るやうとせ向の傍よ室へあらひとあらむ
じつゝと時の様事はかゝるを直勅とて七十句も
け會款とてゐるやうれどもその様おとらまくに
まつて世の時宜とけ向と附と一やうには款
とふふうとちつとも會代の自由あわせと仰情

の地と云はげて一室の裏代は今を取つて一間
へ同所ふるやうとて内面と暗のきくはう時は財
のあらひとて直向へ軽く會款ひきくまに
ふるのぬをもととあらはれの有の附をもん
も場の接和よとくとくあるをひよゆるとも或
ひもくよおはすとく款殊を附の裏にまくと
るがとやくあるももとくあるとよくもゆ
ひくと物のむ極たをきよありてふくと
やうとの位せらるゝとをもおもかく附ね付
あらかともとあらうとあると有の附のやうれり

は附あつたさんむねほの論あり乍より附ひまほす
基るわ某の工支りてよきやうとすとあらわす様あ
も「大もあれど其もとおりあつとあんにあは
高へと軽向とらむをす損もく行よ思ふと句と
はくわく高へとそそげて墨もとなむあつ詳
あるもの風也とちりてあそれへる风浪ともて
「まことに世間の附方をそばに思ふ者と事うて
りや向ひそりよ高へとそそげて眼の筋
先なのほ居とありてせわとあ句のゆゑと歎
おあくひよりおもふとくよ生ふならむよ

ありてまた佩賀のぬ晴とおもく一も餘のむらひ附と
ひふ句の居と起ととひ抱子附を諸路のねりて
宗因の風ようのゆきとまき色立たまきの内宮せ
りて頼政のみまことに河のれせひて向附とひ
い有の附の中れふるときと一例のす難よくあひて
人偏のまゆとやうきみとすあらうぢらひ或ひかげ
かあく様かの面見うなぐと付よ自他の言ふとて
向附のほとひらひ角へふ句と例のたるよし難きも多
ありふとあんに止まのを傳と軽向よらくそぞくま寛
と向よりと一世間をまにゆきぬやう時ひ猪擣とま

まもむと角の弓をひくとよ難をこらへに妻郎の弓をと
妻を佩槍の弓をとよとあわへよみの弓方の弓を
より彼放へ附るとそとを傳よりて大弓よむくはげふと
向附ともりあやぢかと弓へすを傳もあつたるのねば
あづあとのと大弓と郵もとあらゆの弓と下弓のあづ
くらへ墨の詔とあるととあらて彼は有るの傳をだ
「なきとそ人の心修よはけていそらで附やのありふに
赤題のらまのひつりはれらをとみたると朝りて辱も
と辱めのりつりとそぞりおあきふよわざりむくはげふ
向附の傳と足りてふ弓と弓と弓と弓と弓と弓と大弓。

弓の用あれと附弓を毫末の差ふうてまことに佩槍。
ゆく不ゆくと信を一へじてふ弓よりせと起ととそと
連えの人の妻代と弓をと繕れい又弓も三弓もちぢり
て人の弓をのこやうと伸れんと弓も又弓もつひくら
風景がちあんにさとく村の日ゑとさとれ申のね
あらぢうらと附弓をと弓の弓と郭りて弓を
狐よ化されへやうと附弓をわらへと弓のあらぢこらと
弓の弓のあやとやうとさとせだよけと枝へさと
げふと起情ととそとやあらむと向附を端むはの用
うて起情を伸る付の用とあへじうと見事

とけううて御音とい走とい鼓車といふ。ありゆは
お草式よへがの附合ありへうと十論。おふとむりで
附合のわらう五あれす。附合をきくこはうて七堵
八堵も二ほのやれぬはとあく。況や豆韵の古妻
あんづる附合もモルモリに。翁句はされ連歌
も紀谱も佳名を翁句は傳ふ。翁句は太極
の一氣うして塵うりかうりて室よそやれいから
そぞもあく。君もあく。やうて法もあく。すも
畢竟を信の。すくもあく。場をふんとわんとわ
て。すのすのす。だまうと論もとて。みづと紀谱

の。まといふと御宿もありて枕とかくむげも。あ
ね遊山疏水よ人とものあふても虚妄の。いひと
いよまれと御身の。たやうと代人の。たぶと。な
代人の。たようと御身の。たぶと。もられて論語に
行く。とあく。あく。と。と。と。と。と。と。と。と。
えきうて。又備のはと。ちりと。第一に。ま。不。鳥。歌。の
ふと。と。と。と。風。姿。と。と。と。と。と。と。と。と。
いよまれ。いよまれと紀谱。作。の。と。と。と。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。

附合の三法とがじつる。よりなりと云辭十辭のあは
よりかづくに例え爲方ふのふも。か念の起向よ
きよくさんねまをそんの仕合にてめぐらし附
の不運あんそと虚実の虚実とづかく十論の
寛竟と言の変化ありはれども。一たの調子あれ
穀とそやくとそもくとくにせきとへ五法とさすよ
人の右脇を旋とおひのみをちかうて敵と敵
とれらむすけ付を張め刃とやくは引て高甲アカツカ
ぬうよか割カギスすとまくとまくにげをとまくとまく
手の文武の城とよひて附合すと海とがて勝は

とあんかくとも我行の字を達するにいたる
せはの附合すとて虚実の変化のとせはのくわ
あれど併隨とものりふとあくびくとせはの変
におとこううされどや

傳の世故とほよ知漏りて人天の事によ哀れ
とちるくらひくら儒師の教あるくまくせはの
接觸とよく一あくと化消よ古今とくらひ
百韻の變化のらぬちるこほだるのまゆう
きよく仰のゆよ一念の変化と況てくつて
九十九那よ方をくじくらむ一念のまゆよ西

と云ふる言によ文章の互通と称するに能諧
のせ法と信を以てんやぬとある。能諧の附と
あるのを要あれ。オ一とく有く附とづいてお
オことへも次もとづるゆゑを即席の一の文だ
うてこれを文章の能ともいふ。例の能諧よ
りあるといつても能諧の古今と能とも云新
の能ともいふ。能諧の古今不會底の事す
あんまに古今の能とほど。

「又始終」
「古比」
「御」
「御」
「御」
「御」

此れは能とあみうる。昔の能諧の所とにく
きつけやよ人のやへきせか。改めらきてつこ
のやをとうゆうじ今の大能諧の所とあひて中に
うち。またとねくらむれとげくの餘情を
文多か優游とよす。今や其ハニと
其ことと諺と傳仰をもこと況てくして
律美とよす。と能諧とつひらく。すばゆの
一とみにて幽まよあらうと凡恥とよまざや
凡恥と教諭の諺と張するす。書室銘もあり
後思と計頃の質もと難い。東西の二名の

えあくすと教とくらうと參拜とづい崇眞が
えぐらまく金て日雅のまつともにあづるる
勸學文としり座右銘もよ(まやと白馬
の文章訓よけ論あり言ふ人のやまと(まふ
あれ)始終の二と附賀のばととどりばと附合
のなる中に教と色三の作文とほど
追もこす

お用へす

字川畠の教の者とくわうきと
此句と檀林のえりとよて例よ言作の教と
傳と持のあくすけとくの化鴻の聲とも傳され

ハあくに御の裏とまくべ・教ふをばよ其の聲
とまくべくに

おふまきとまきとまくべ

河の園

けうと頼政のねぬうと全く能國の事と
さくあくはと陸奥よ万里の情と傳え
を阿よこ色の姿とかうやうと遠近の角不用
あくと坐すのらうの名ふうと今ももれ
ゆぬありとやにもせよ朝をいあくすと
きてぬりとくのすがとくすとがねるでも

すらうとうとくに今世の連詩體はよほだつて
あらじゆの文章とちうね何をうちやうもうか
せんじゆと同意する事まれともいふこと、而ま
類説しげきの論めうまうれへかゝるの景草と
花淡るの色のえらせりしと、酒句の甲せ一聲と
ちどり蓋りよる各の文法を取起せと向附と
ひねて中と旅とと色とと兩句の對とある
孔ふの二ふと細ほそとと隔の錯綜を
双圖の法も倒ねの格も句後の長短も詰路の彭朶
とももくして此句も(ミヤ蓋りよけ段の不可置)

ハオ一の發句より始む梅とだけとよよのよによ
編こなすとやまよ他階の虚言とあらう言に
十編の信偽とさよほさんや況や。論語の行持
とひかてて民と又偏の二句として奥觀群怨の
口意とばくまんじゅと白馬の文童訓よ怒の
一毛より通遠のニ子と舞して早見と鳥歎
竹木の用あんとさよにオ一の詞とぞ、磯碑
の法もそうちやうてほのの諺とえにぞれり
ぬ一津よけ段の畢竟を子重方化も期(よ
よ)り見たよと有心附のふよありたれまき

之を鳥も新しくて居てもつれひ又母も古く
新古と今風の変化にて作戦の傍よる
やまとづん諱の云事と兵家の方法これと
する世から思ふ一者と併すとも御家の
お段と竟東あまとふあじまに水又の句
ときてせ十論と看破とくわざとを
せばのれとあづい虚うまの二論と人よりせ
とらもよて御階とちくもの遊あわせと
涅槃のす不説よりりて論とくわざ賦は
のうあく身

四十法式論

とも御階の法式と連するの家にえあひよる
遠波のす一合も仲木鳥獸のまきいも一束
一句のねと二句とあくち七句うちねとみ句と
み句うちねと三句とあく三句のねと二句と一束
よをぬきりやうり。要典の捷もじるをとせう
あんすとわいはとやもくすとらふとせう
一束とすのたうひうます韵とつへて韵とつ
一部の字と百韻あるもせせしと御階のほ

眞はの侍筆より壁木に斧とづれ噠艸に種を
ひらひくもよし。今もまじめのちねおほせともむ
へ古もゆふるくやれせむすと一方の御裏あい
きやくや、春句のゆすり服の韵すのし才この
も余はも哉ヤナと來との和訓をつむし様と空とれ
まよ遊ケリも指合を何のねあらん我を心喜はせ
ちりやむ八月を假うもくらん我を心喜はせ
とよ能智を何のゐあらせくはキの名まへゆ
もまでもねとふまときうなぐもあくとくふ言下に
まよへてもつる論證カ夫詩のやくとも君文のたぐら

うて歎ふのふとあれとそよき識の三事とすとくや
銅の生れとゆじくとくうふなどあととあらむ
遠くと儒席のまよ向よ近くとけよの義あよ
情くまよひてまよむちやくもむむちよくもと
かへまわと耳うと耳よすほくとくうじよくの
くよりらゆりくとやれせや能智へやあほくと
我すと知とづひあく何のやくと何のゆも我と
ある者と一人もあすあくとゆくとけ費くとん
きくとすお万はよ文まにちうる書物あへ一あ
二あふとそとまくとくよほくのがとまくとく

ちんを例の新詩うかくえりへ連れてあつすれ
便陣猿乐の隠拂とあらて能谱といふやうかくや
うまむじけなむ貞吉すかうと宗近の行と判者の
法と新詩の二條よこうちへ執事の行と一條と
あらまきのはあり連えのはあり又條の例のいわ
ときまつて内て宗近のくわどりすをすにもだみ
人世とてそりげて我向よくとてまくへりんの宗近
の教とてくわどり調子と先よこまよめきす
凡雅の運ちれはまの能谱めめと歌ととがじふに
らへぐの附句あんにオーち附ふの方ねうだる

とすみて附句の藝術と称してお句づきと號す
オニをこの句のお句づりの文句のぞくと號す
足折の变化とて論のよせがくすあ句の面見ふ
あらやそれ向作のあおもよ近づきまとて起句
の行ふと作るへまきと一指合のくわとねのの
役あれはよ近のひとほのやまとてはあらんたづれ
のふくわはとやまととまこと保つとそれとま表舞
とする能谱をねよ新詩あるより二つの設舞とよ
みぢりてよ近のトアシと云ふの用やあらべて
月をのあらひしむニキニキにやまよつる彼岸のれ

もてまにこそあらうてかのまへ各句よすれへまと
あるわあり附句にすれへ難とあるわもう詞のこ
も物のまことにそゆよまくへまへよとうどもる
やうりとううちむちうう新事のかけふるとたきすす
附もうをゆつがへくれちうときそそはううれらを
おややけのねへづくへそえにそくされへも感とく
ま和とせまくふれへも信あらへきけむと生え
ほえてそまとなすやうあひあうほへきく家近の
名とよひかへまにた人の詞ありあよも重う
それ威あら威あられの信あとせんじよ

無とあらじに妙ふと信のまへれいれに消ふあ
有柱の所よしらんらんと能活のあへこり笑言
さうへとそらひむに例の一筆とまくらんとくと
古人の胸のすかへひよあむ次と判名のくわとふと
常道の體ふるむと射行と仰と善薩とととき
こ十二應の自在とがく世法とあつてよかふあんせれ
ひの勝劣もむじとくとくの射とあひて連御
ひ賭物とあらすと附も判名とあり況や豆粒の豆式
あらすと名とも判名とあり況や豆粒の豆式
とも長と豆の法あり圓と豆の格あり秀逸の豆と

例の危々れへ點もせ點も判者のまゝと云ふ一考
判者のふりを化粧一たんの點とすとまよへ
やうももよむる付を宗近の附金とすと
指含らざるの役あれど同よあくろ時いひる金と
ゆゑて一ふの店とすと判者のふの事とねく御
あるのとあにあつまと附合のもとへの事と
そひきとくよづきとよじかがゆうと勧懲の法
ありとせなと一かの事と勧うて一因一堵の人と
あひりみゆとあひじうきとふにもぐと判者の癖
とすがへ判者とぞ癖よ化粧とほりて、早ち

具堂の詫詞とありおじられと兵者の額うりて
價とすれんと比論よ及つとせども判者の事と
もこれくせはとあつよ大すとと世間の能滑の
とあと判者のらうととくまわととくまわ
ひかくあれからありてこみじふのらへとまう後
も堂の能滑とヤシとモウその中にまえのくわいで
例の難ふとあとへ戻りて能滑をさうともかく
もあくにとすとつてとモウのあめんにとよみ
ちににくみゆうととけと自己の眼とひれて
判者の虚妄と看破をしととて駄書とすとまよ

射賀とひの祖錄とひす疑一次とひりこわくを
儒仰のや該うて下なるのくもとが法をすよ。教化
の人れ大和すありられやむし。也説をへぬ言あ
とつよ判あり。そせを附の事とせとこそ連音
の深奥もひれぞれまろ眼まじもへられ。今や
我門の儒説もと儒説のくもとわらあれ。儒説の
詞とよおらあきとく。瓶波の辨とにくへゆの
詞とかまると連音と儒説の次もとあから。從な
我家の私事と雅言のくもりよ。儒説の辨ありと
儒説のくもとを儒説もあらざることのみ様と

おもむくと新梨よなみの傳訓もひまよ雅言とい
保証とつひとちくし儒説のふ用うちにもすりと
ととされうあいとそれくに儒説のめぐと來ま
ト
津やせの年の善言と西言の口ある者の口とあ
されよ。病の有せどとす年目の妻細と稀セキシヤ
セヨヤクハ儒説にくき人のとくをと。十四十色ある
儒説くまともつりからありとするせれい故の
人よて世中の儒とあつてんゆ。教よ執事のくわく
宗近の機事とくともし連えの潤すとまつもと
假名と真名とせ配と。母あくまできくと偏書の

まされありとよしにひをやくちきんむれとゆの
かとあー例よ指合シカイと吉縁をやもしれま
役あらへ人の附するひよりあらんねうを
ちて指合のあははうふ近の事とさんく竊ソクトモ
トド^{トモ}セもらゆそ人の句よどりても候と申す
もあんせれもせおのわらへ一せのれ節セツとあらん
うとじれの爲ハタひよるとあやまつー音よせほのね
と諦ナガと指合シカイとすとくおほのすや詔路の指子の
あさなに去穂クモとすとくおほのすや詔路の指子の
ちかんと一かの度ヒトのあーおぬに詮美シミよこれ

ぬとくねくはあやまのふあじらて一びと文書に
あきく名向メイコウをなしひ後アフター次第に作成の名
とよじよと名向メイコウを後アフター名向メイコウを何ナニとよぶ近よ
前マサニとよぶ近マサニやあくせに備度ビドウの奉
ふとよぶ近マサニやと命マサニに備度ビドウを。諸事スカシとあらざれ
我ワタクシとよぶ近マサニせとよときてあらてはすといひひとあれ
とよよよよとよとよとよとよとよとよとよとよと
辛カツめぐらかとよと勝ハラハラのれをよ立ちうて喰シムわの事す
と達行タクヨウのへよもよもそれとよ近マサニよ通スルとれスルがと
既タリとよらるやぢれタリと我家タチヤの面マカニコト通言スルをよら奈

。ごく皆うなづきを御遣のとき等とあつてひど
ありはぬるの戯あら論語の精ひらひよほりで
ふとひてそと例のあらえやられと厭りと
あらえよりよまの優れどもひおでさまに雅俗の
あらひともがぞ成る文質の論どもあんじて新式の
御饗れよと席を一けニ葉にとど余とたると
かまうあらわくよの悉くよ氣とほきと辛との
括構よすと一涌とニ歎よとくしとち
淡や茶人の時からむ御賛の供給とあつとひど
かまよひとけくわよ屬行わくとて時が馬鹿

。おこさうかくらんかくと立とのがよりか
御饗應の軽くともあくよ。僕約のあくに例の
ねもしに例のあくにんもむあるとまくとせに
客寄句といひきと脇とくわくいとくわくよ
くに寄句と玄の往くもあくもあわくも
詞のあくともあく。服をききの傳よせくもふ
ああくとみの筆と謂うもや服の著は
け出店もあく。一せよもくとみの筆とあくのむ
とよすありせ名の能造の儀式をもじて奉納追善
の事くひもを寄句の作名(モダヒトモア)始と

換とにえふとあらへりとおまくとういふるや
もすとえふのやうとあらへるやうの表へりて
裏へりとひらはすとえふとひらへるやうの表へりて
せとに一歌とねあるとみゆやモ席と奉句とは
あらへ或と一歌のをへり或と一家のをあるべく
もの財ととんあらへるやうの法とに奉句ともむ
「一からて鶴たの再びよみをとせ」かへば
うの老より奉句にけて押切二をよむト
もとの儀式と云ふやうのねじ法が
諱をふのをかへるやうとあるやうの法と連えの

「おとすと前よ衣食の様様とつゝも、まほも席の
時かよおうれとよしくて、あらへて文書もせ
きくわざとみづて、家臣の床向よじうとせと
よ一歌と潤づる時とて取次をひいて、句と定めよ
連れのよの儀儀よとあとけんるやうの席よ
小懷紙の写しよて、而て破りてよろむて「一から
えまごとてかく頃の指合ふよとあらへて、席よ
のよじうとあはむねえ配の次があるおあれ、辞美
よかよひきよからりてすされあり膳中の詞の
せあれあるよいか、前句とひととみてねるよ」

角、宗匠もとつゝすもうかうじ一句、宣とも
お吉士近ともせ教を左式よ。五條あつて今も家
ス記もとた及ととを家で能活の席と傳とくす
せ故の人和ととあて論語は、温厲の事とかり
オニと説美の風俗よあらいく、閑雅よ、哀主の頃
とあれや能活もモリのほ晴よいくよあれ
ふも一時の事あんせても秋門の能活節の能活と
能活のトアモアモある能活とぞし何の能
活キとせむ何のなちるやと、もろとももや能
論とさうぞ、玉詔の事の風と雅とあらわす能

もれ庵が今貰の戲りて靈言えととつゝ口承し
度えよからひ次も抗ととつゝ老を鳥の和よあら
モノとと、能活とよみかづくきとく、鳥正まのま
ともうにともお復よ滑稽自在のぐと

傳、世篇と全く我家のばあ、能行のま
かうねんも書けずあらくたうの三重脚も
あらうやとまつてたずの二と帰りてそばに
何のあらうやとまつて何のなううかと法す
所謂とあれどやと金とと貞女御の年月とに
て五條のふるととくらうてとお直つむよ

一月の詫とよすとても日にも場の接觸あれば
はりたゞままでくそにひきうな通す

宵闇をあらわす秋の月をもとさきの
やうり秋の月をもとさきの

世向をすほの初折にて月秋の七向同うちに宵
闇と月の階かへされく秋よ秋月の感えと
うあれ、モ次のみよむづきと例よ遅えの
宵闇をあらわす月れと含まれりとまこと
月とよすとくとちて

八月を旅かゝるよ十幅席

あらわす一月のる譽ありとてモ比よせばとく
我門のた、廉生とぞれのまぞれをも闇とよす
とくとくらげ店もあらへまとくふ匠のうけと
うけぬよ一月の詫とよすとくの條月と
かくとくとくとく私とのまに旅かゝるよに一月の
虚実とよせんや蓋あよけ段よ月雅の運と
詫とよ馬よ祖母の常詫ちりうちと黄門の
家訓とよるの眞加とつしる運とよる月雅の詫
の須便あよげ詫と例の月腰かくふへ
済よ執事のわらとて假かよと真かよとて配と

但ける。と。方法。も。あ。に。東華。ホ。の。文格。ど。り。其。書
の。書法。と。と。あ。く。連。亨。と。あ。く。假。名。を
り。ら。り。て。假。名。と。お。ほ。く。真。名。と。り。ら。れ。れ。が。
と。真。名。と。の。假。名。と。あ。く。上。下。の。連。接。の。い。わ。が。
は。あ。り。き。と。く。左。右。や。極。き。い。の。水。の。ま。の。き。
水。の。假。名。假。名。あ。く。に。極。き。お。こ。し。水。の。ま。と。く。
句。論。う。て。真。名。よ。か。ね。く。あ。る。も。あ。れ。も。
主。附。を。み。む。ひ。水。の。音。と。用。の。む。の。ま。と。か。よ。
お。よ。ふ。う。・。あ。和。の。風。旅。う。て。假。名。と。假。名。と。の。配。
ラ。フ。の。通。用。と。き。ま。と。や。け。や。に。フ。ヒ。への。音。韵。

イ。キ。シ。ク。の。吸。三。横。レ。芭。蕉。内。の。假。名。遣。と。て。貞。享。
キ。の。一。條。と。あ。す。例。の。口。付。と。と。け。れ。モ。も。り。り。
お。の。ほ。キ。ト。と。そ。ア。と。せ。り。う。て。付。と。ま。く。ま。く。
も。う。古。付。と。あ。や。か。う。と。用。や。る。ま。せ。う。何。の。な。ま。
き。れ。カ。す。あ。り。た。れ。と。ね。亥。の。ほ。と。う。れ。う。例。の。
附。と。え。く。い。く。え。も。う。ま。と。き。く。い。る。亥。の。一。ほ。
あ。し。蓋。や。キ。ニ。の。條。同。に。假。名。と。す。と。う。そ。い。
る。よ。教。化。の。大。秘。代。う。つ。傳。内。と。と。繩。言。ロ。ひ。
を。家。う。へ。そ。と。寓。言。と。つ。況。や。傳。書。の。虚。實。
自。在。ろ。ち。み。す。余。や。と。と。金。て。方。假。設。や。そ。

に指月の喻とまへ言に化説の用とせ用と
あくして書かやオニの條同にえられ等とくら
ふに人和の邊属ある今と云私のニマニ説
て法の私曲とさへもする言に十論の云道と
云に十論の云法とよひてはやれど万葉の
五條同とちとくおいかげの文道とるはの
二篇よりえとちとくは式の一編より虚とちとく
先づ一巻の詔つて後へわづの書と
叶十論又巻息と通つたりと化説のふと
よつたて下に核説壁説と一思えよ傳行

のは教とくも忠信の教の諸道の行かうてされ
通とく文行の学にありがくするの差すとちとく
こゑのきとぞれとくとくじめかわされくも
かくとふと化説の行のまたつて高易の
人のゆくやくとくとく
さとも十論の次からせりをすとほとく
オーと化説と詔説とにあつて古今の差ふくも
より化説と儒師とやくけて今と古きの媒
といおニとくをなのまづきにそよ其へ
化説の行即とく其ニに化説の面を竟とまづ

オニ取るへて便となりぬとて向う連手のみあが
とまれたるまへば三トをあらじ年はす連手
の伍よりつとどもも用ひてにんに能活としむ
スナーナーてがわとれんとに善悪のことを
こげきしげるませはと後はくして法家の討論
と推論しやちもんにしたれの區属としひぞ家の
一節とぞる事と我家の風骨うへて、醋吸の
こりも然識の要文あんそよと能活のたゞ
とあ／＼文章の法格とあら／＼もとに或ひ上よ
の下より心／＼トものとよに心ととよる事に

六藝のじ極とちるべく或ひ言語を以てよ／＼
詞のあやに病とすとけくまに能活の接觸と
ちく／＼況や所あく下のとすと能活の一門と
單／＼する所とてもると信とらんやけと
もととすらんやまとを今りの門とほ
せたとけくまにとふすり／＼いとく／＼ハ十論
の藝術とアヒト妙もと能活の儒師の兩道と
能えりよてはくの二門と功とあらざれ
と能活の論語ともいそと能活の法詔
づひ詳と述のまゝり竊とを數えよ

三十論の筆意と云ふを知りて其へと
そへ紹とぞり付く所にあらず。老子
に春秋の歎息も口訣達广に標題の義に詠
モ家くの秘訣よりして四十條は要文也。之に
今より一條より訛説とにくして三十論のやせ。大要又
とぞく今より焉からや論語の卷百八十章十
九と字の一章より訛と云のすとて言ども
されんとぞれと萬古不易のたらと訛説也。
も言ふを論説あり論説とつゝ訛説也
訛説とぞれと虚字よりても虚と詠すれ訛を

とぞりとぞと論され孔子とぞとて論語
のるよもあらー。その言語う虚字よりよし
づれの虚字うえなよし。更にの
樹トヨリ一ミヤ君ゆくや仰書の卷百八十
論あれん論は律あらーともまとぞくと
ちよし。こ等一言の故くくずくれく儒公の
たるも阿難迦葉のえ言にけり。有若曾參
の言語よりうやうしてゐる文章のあきと不あき
こちあれと辯詐う真言うれ論引くがにさりて
和漢の凡雅とほとく遠くそばのことを爲り

曾頃の一言とりてせどもひ近くす手書の
代筆し浮橋の詞とぞりててよ内川の
えりとあれりき。アヤナ論のほをと
まに論名の大功とほとく傳行。木鐸の喻と
もと例よ所詮のふう。いもう御家の龍樹
も吉薩のふとやあくせたの論師とあら

ちう



